

THE DAILY JESUS NEWS

An ATJ Ministries Publication by John Wright

デイリー・ジーザス・ニュース #297

木曜日...指導と逮捕の日： 「大祭司の祈り」を捧げる

イエスは父なる神の栄光を祈る

ヨハネ17.1-5

1 イエスはこう言ってから、天を見つめて祈った。

」父よ、時が満ちました。あなたの子に栄光を帰してください。そうすれば、あなたの子もあなたの栄光を現すでしょう。2 あなたは子に、すべての人の上に永遠の権威をお与えになりました。それは、あなたが子に永遠の命を与えたすべての人に、永遠の命を与えるためです。3 永遠の命とは、唯一のまことの神でいますあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストとを知ることです。

4」わたしは、あなたがわたしになさるようにと、永遠にお与えになったわざを成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。5 父よ、今、世の始まる前からわたしがあなたのもとで持っていた栄光で、あなたの御前にわたしの栄光を与えてください。」

注: 私たちは「混合テキスト」の原典福音書を次のように上付き文字で識別します: マタイ =^{MT}、マーク =^M、ルカ =^L、ヨハネ =^J、使徒行伝 =^A。この「上付きID」は引用文の冒頭に挿入され、別の上付き文字が現れるまでその聖書書を識別します。さらに、**赤いイタリック体**はイエスの言葉を示します。旧約聖書の引用は大文字で書かれています。

コンテキストダイジェスト

位置	オリーブ山への道沿いのブドウ園
タイムライン	4月上旬 (39ヶ月目)

イエスの生涯の文脈	第8段階：受難週
	D. 木曜日：指導と逮捕の日
	イエスは大祭司としての祈りを捧げる
タイトル	イエスは父なる神の栄光を祈る

前の朗読で、イエスは弟子たちへの最後の教えを終えられました。それはイエスの宣教活動の中で最も深く、最も重要な教えでした。なぜなら、イエスは教会時代のすべての信者がイエスとの関係を維持するために頼るべき、最も重要な真理を明らかにしたからです。

イエスは、聖霊の人格と働きが私たちの内に宿り、私たちをご自身と父なる神に永遠に結びつけると約束されました。三位一体の神のいのちを特徴づける愛、喜び、平和が私たちの内に生き、育まれると約束されました。イエスは、ご自身の名によって祈る特権を与えることによって、歴史上最も重要な祈りの約束を与えてくださいました。

祈りに関する命令と約束で教えを終えた主は、今度はご自身の祈りの務めへと移られました。ヨハネによる福音書17章は、福音書の中でイエスの祈りが最も詳細に記録されている箇所です。この祈りの内容の20%以上を含む祈りは他にありません。マタイによる福音書6章とルカによる福音書6章に記されているいわゆる「主の祈り」は、イエスが弟子たちに教えられた祈りの指針であり、私たちが祈るための備えとなるものです。イエスは、この祈りの一部、あるいは大部分を実際に祈られたかもしれません。確かなことは分かりません。イエスがご自身の罪の赦しを祈られたことは決してありませんでした。

ヨハネ17章は聖書の至聖所です。聖書の中で三位一体の神の間で最も重要な交わりと交流が最も広範に語られているからです。神の子であるイエスは、まさにこのように祈られました。

多くの学者はヨハネ17章をイエスの「大祭司の祈り」と呼んでいます。なぜなら、イエスは教会時代のすべての信者のために執り成しの祈りを捧げ、心を開いて祈られたからです。この祈りには、史上最大の祈りの要求が込められており、最終的には何十億もの人々の永遠の命に影響を与えるでしょう。かつてこのような祈りをした者はおらず、イエス以外に、これほどの規模で祈る信仰を持った者はいません。

これは、三位一体の神が望み、考え、優先するものにふさわしい、神にふさわしい祈りです。イエスは三位一体の神の「御名によって」祈っているのです。

祈りには以下の3つの主要なセクションがあります。

- (1) イエスは父なる神が自らの死によって栄光を受けられるように祈られた (17.1-5)
- (2) 弟子たちが、イエスが復活するまでの間、(信仰に関して) 安全に守られるように (17.6-19) 、そして
- (3) 教会時代のすべての信者のための祈り (17.20-26)

今日の聖書朗読では、イエスは自分の死を通して父の栄光が明らかにされることを祈っています。

、「自分の時」について語ってこられました (ヨハネ2:4) 。初めて語ってから2年半の間、幾度もその時について言及してきた後、ついにその時が来ました。ユダはユダヤ人の指導者たちと合流し、彼らをイエスのもとへ導くために出発していたため、イエスの逮捕、裁判、そして十字架刑の過程はすでに始まっていました。イエスは「自分の時」がまさに来たと語る際に、再び完了形を用いました。

これから15時間にわたって彼に降りかかるであろう苦しみを考えると、この残酷な運命から救ってくれるよう、父なる神の救い、あるいは介入を祈るのが普通でしょう。しかしいエスはそうではありませんでした。イエスが唯一望んでいたのは、自分の苦しみを通して父なる神の栄光が明らかにされることでした。イエスは自分の苦しみを少しでも和らげることではなく、父なる神の救済の目的を最大限に達成することを願っていたのです。

イエスは生涯の一瞬一瞬を父の計画に従って生き、御業を成し遂げられました。宣教活動を通して、イエスはご自分の権威を、民を支配するためではなく、愛をもって仕えるために用いられました。それゆえ、イエスはご自分の力を用いて、弟子一人一人が永遠の命という賜物を受け、その豊かな命の中に安らぎを保てるようにされたのです。

この約束は、イエスがすべての人々の身代わりの犠牲として死ぬことへと導きました。それは、私たちが罪を赦され、イエスの義によって命を受ける資格を得るためです。イエスはご自身の死を決して個人的なものとは考えませんでした。それはご自身のことではなく、御父がご自身の死を通して永遠の命を与えるという計画を成就するためでした。

イエスはまた、受肉によって一時的に放棄した天の栄光の状態に戻れるようにと祈りました。天で当然の栄光と同じ程度が、地上での苦しみを通して完全に現されることを、熱心に願われました。イエスにとって、なんと崇高で無私無欲、父なる神を中心とした視点だったのでしょう。イエスの祈りは、これから待ち受けるあらゆる困難を通して、この視点を維持することだったのです。

応用：

イエスが自分のために祈った時でさえ、それは自分のことではありませんでした。イエスの関心はひたすら父の栄光に向けられていました。聖書に記録されているイエスの最初の言葉は、12歳の時に神殿で語ったものです。「**私が父の御業に完全に身を捧げなければならないことを、あなたは知らなかつたのですか？**」この揺るぎない姿勢こそが、主の最初の祈りの動機となりました。それは、何が起ころうとも、父が最大限に栄光を受けられるようにという願いでした。

祈りの動機は重要です。結局のところ、私たちのあらゆる願いは、自己中心的か神中心的かのどちらかです。私たちのあらゆる祈りは、自分自身のためか、神の栄光のためかのどちらかです。イエスは、常に神に最も栄光をもたらすものだけを追い求める私たちの模範です。

祈りの中で自分の動機を確かめる習慣はありますか？それは簡単です。「もし神がこの祈りに答えてくださるなら、神のご利益と栄光はどのように実現されるでしょうか？」と自問してみてください。

イエスの御名によって祈るなら、その答えは極めて明確になるはずです。あなたは祈るたびにこの質問を自問しますか？